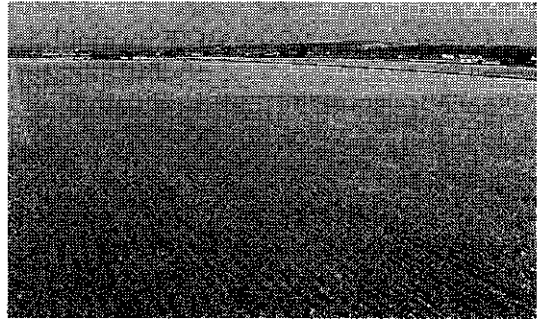


産地、今(3)

リ レ 一 随 筆

北海道の米産地だより

(北海道立中央農業試験場技術普及部
主任専門技術員 たなかふみお 田中文夫)



空知地方の水田風景

The Introduction of Rice Producing Area in Hokkaido.

By Fumio TANAKA

(キーワード：産地だより、北海道)

今、北海道産米の評価が高まっている。

本道の水稲栽培面積は2001(平成13)年現在、約122,000 haで、1969年に記録した最高面積266,200 haには遠く及ばないが、ご存じのように日本一の生産県である。

地帯別には石狩川沿いに石狩平野と上川盆地をつないで南北に伸びる空知地方、水の都・旭川市を中心とした上川地方、石狩平野を擁する石狩地方、日本海側の北部に広がる留萌地方、広大な牧場を有する日高・胆振地方、本州の里山をイメージさせる後志以南の道南地方などが主要な米どころであり、いずれも特色のある特有の稲作風景が広がる。さらに、その北縁に沿って網走、道北などのもち米産地が位置している。

1 主産地の特徴と北海道米の現状

最初に栽培の古い順に各主産地の特徴を概略したい。まず、道南地方は最も栽培の歴史が古く、1685(貞享2)年に亀田郡文月村(現 大野町文月)で高田吉右衛門が開田したのが嚆矢とされる。この地帯は温暖な気候が特徴であるが、海洋の影響で夏期も内陸ほど高温にはならないことが多い。多くの生産者は野菜との複合経営を展開している。

石狩地方は後ほど述べる留萌地方と同様に1858(安政5)年頃には造田がなされたとされる。この地帯は石狩川の下流に位置し、豊富な水資源を有するが、泥炭地を多く抱えている。

留萌地方は海岸に面しており、夏は高温になるが、初期生育が比較的遅延しやすい地帯である。近年、この点を克服する努力が実を結んで高品質米の生産が多い地域と位置づけられている。

日高・胆振地方は1880(明治20)年代には栽培面積が増加していたとされるが、夏期に太平洋の海霧の影響を受けやすい地帯である。

上川地方の栽培の歴史は比較的新しく、1891(明治24)年に旭川での開田が最初とされる。上川盆地を中心とした夏期の高温、豊富な水資源に恵まれ、道内屈指の良質米産地となっている。

空知地方は1892(明治25)年の開田が最初とされるが、現在は道内で最大の米どころである。一戸当たりの栽培面積が大きいことが特徴である。自然環境は一樣ではなく、強風地帯や泥炭地を抱えている。

1988年に奨励品種となった‘きらら397’は、収量性を追求する本道の稲作に終止符を打ち、同時に「まずい米」の代表と言われた道産米もついに他府県並みの食味に達したことを道内外に告げた。その後は、急激に栽培面積を拡大し、道産米の評価を高めた。加えて、1996年にさらに良食味の品種‘ほしのゆめ’の登場とともに、本道稲作も安定期に入ったかに思えたが、1997年の急激な価格低下によって、生産者は稲作経営の将来が見えない深刻な事態に追い込まれた。

しかしながら、関係者の努力が徐々に効を奏して、「安い」、「おいしい」道産米の評価が定着し、2000年



生産者を対象としたカラムシ類すくい取りの指導